

# サラエヴォに灯る希望の光

サッカーを通じた民族和解の試み

森田 太郎

はじめに

1. 産声を上げたクリロ
2. 帰ってきたサラエヴォ
3. 「サッカーがしたい」という思いを胸に
4. 境界線の重み
5. 二人の挑戦者たち
6. サッカーが持つ力の偉大さ
7. パスがつないだ民族と民族
8. ボスニアの労働者たち
9. 親たちの決意

終わりに

## はじめに

秋野豊ユーラシア基金より頂いた研究助成金は、提出したプロポーザルに従って実行したプロジェクトのために費やし、2000年11月26日をもって終了した。私は、この調査報告書を通じて、現場のサラエヴォを二つの側面から語ることにする。一つは昨年(2000年)2月17日より開始されたプロジェクトを、時系列に従い現在までの変遷を報告する。もう一方は、私が見つめ、感じてきたボスニア・ヘルツェゴヴィナの社会と人々の姿を、プロジェクトの背景となるような形で描くことにする。

\* \* \*

秋野豊ユーラシア基金に提出したプロポーザル「旧ユーゴスラヴィア諸国の民族融和を目指して」は、2月17日の出発を前に、「サラエヴォ・フットボール・プロジェクト」<sup>1</sup>と名づけられた企画書に書き換えられた。この企画書は、当初その期間を2000年2月17日から4月中旬までを予定とした。そして、プロポーザルの要点に従い、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの首都サラエヴォにて主要3民族<sup>2</sup>から構成される少年サッカークラブの創設を目指した。

しかしながら、この活動は「民族融和」という目標を変えることなく、現在2001年6月まで継続しており、今後も活動は継続する予定である。

サラエヴォで誕生した少年サッカークラブは、現在主要3民族で構成される25名の子供たちと、2人のコーチ、そして2人のコーディネーターによって運営されている。主に毎週土曜日曜の午前中に、練習や親善試合を行っている。現在チームは、子供たちの保護者にまで範囲を広げたコミュニティーに成長し、子供たちの間だけでなく、保護者間の交流の場としても価値ある存在としてサラエヴォでの活動を続けている。

このプロジェクトの主役である子供たちは、練習の時はもちろん、練習後にも帰りの車の中で互いに話しながら笑顔を絶やさない。練習の反省、学校での生活のこと、そして恋人の話で互いに盛り上がり、まさに友人としての絆を持ちつつある。ボスニア・ヘルツェゴヴィナは、政治の場では未だ民族間の融和は進まず、歩み寄り

- 1 サラエヴォでの2ヶ月間の活動記録を記した企画書で、当初は日本のNGOである「国際ボランティア連絡会議のプロジェクト」として位置付けた。しかし、私の帰国後、サラエヴォ・フットボール・プロジェクト(SFP)として独立し、任意団体名となり、現在まで、主に資金面でFKクリロを支援している。代表は私が務めている。
- 2 ボスニア・ヘルツェゴヴィナを構成する主要3民族は、ボスニアック人、セルビア人、クロアチア人とされている。

のない社会の中にあるといえる。しかし、その国の首都サラエヴォで、ただ楽しくサッカーをするために集った子供たちは、多くの大人たちが越えられない「民族と民族を隔てる壁」を越えようと、大いなる心の成長を遂げている。

しかし、現在輝きに満ちた成長を続けているこのクラブにも堪えた時、耐え忍んだときがあった。子供たちには「民族と民族を隔てる壁」を強く感じる苦しい挑戦の時期があった。彼らを支えたコーチとコーディネーターは、主役である子供たちの心のケアを考えつづけた。そして、民族間の交流という世界に、少しずつ歩み寄ってゆく子供たちの姿を見つめながら、自分自身の心と葛藤し続けた親たちがいた。

私が民族と民族が交流することの難しさを強く感じた時期は、主に2000年の3月上旬から4月上旬に凝縮される。私は主にこの時期に焦点を定め、私の1年半弱の活動を報告することとする。

## 1 産声を上げたクリロ

サラエヴォ到着の当日である2月18日、民族融和活動の実践を目的とした少年サッカークラブ、FKクリロは創設された。サラエヴォ西部に位置するイリジャ市には、まだ分厚く雪が残っていた。

この地を本拠地とするNGO<sup>3</sup>では、昨年と同じ時期にボランティア活動をし、私はNGO活動を通じてサラエヴォという土地に入り込んでいった。その時私を支えたのが、クリスティナ・シエシュリーヤ女史（以下愛称であるティナと略記する）であった。その彼女は、1999年の10月からこのNGOのディレクターになっていた。私はこのプロジェクトの拠点をこのNGOと考え、その中心的な人物を彼女と考えていた。それだけに彼女のこのプロジェクトに対する最初の反応は極めて重要だった。

ティナは、私が持ってくるプロジェクトの内容を知っていたかのようだった。企画書を読む私の顔を、笑顔を絶やすことなく見つめ、溢れ出る意欲を私に素直に伝えてくれた。内容の全てを伝えと、彼女は「待っていたわ」とでも言うように、私と固く握手をした。その日がプロジェクトの扉が開かれた日だった。

さて、企画書の骨子はというと、以下のような内容であった。15歳以下の少年少女を紛争終結と共に民族を分断した両地域<sup>4</sup>から募り、両地域の練習場で練習を

3 「よい明日のための今日（DBS）」と名づけられたNGOで、イリジャ市に本拠をおき、主要活動内容として両地域の交流プロジェクトによる民族融和活動を行っている。

4 ボスニア紛争終結の和平合意である Dayton 合意では、民族別に行政単位が分かれ、主にセルビア人が居住するセルビア人共和国と、クロアチア人、ボスニアック人との連邦であるボスニア連邦とに別れた。

行うこと。そして両地域から指導者を募り、私が帰国した後も活動が継続することを目的としていた。

この少年サッカークラブはFK クリロ<sup>5</sup>と名づけられた。「クリロ」とは、現地の言葉<sup>6</sup>で「翼」の意味で、「希望に向かって羽ばたく翼」「民族と民族の壁を越える翼」という思いを込めて名づけたものだった。

この時、この「翼」が羽ばたくかは、私とティナにかかっていると、私は強く感じていた。そんな気持ちを感じていたのか、ティナの表情にはこのプロジェクトを成功させようという強い意志と、確固たる自信がみなぎっていた。それは、セルビア人でありながら、3年半ボスニアック人、クロアチア人とボスニア連邦側のNGOで民族交流のプロジェクトに携わってきた彼女が、身体で覚えた「活動の精神」というものがあるからだとい私は感じた。

限られた2ヶ月の活動で出来ることは、全て企画書に書かれていた。そこでまず私たちがすべきことは、プロジェクトの核である子供たちを集めることであった。以外にもこの子供たちの募集は翌日の19日からスムーズに進んだ。そして、2月の終わりにには、両地域から計18名程の子供が集まり、サッカーを楽しむには十分といえる人数を集めた。

子供たちが容易に集められたことには、いくつかの理由があった。一つがティナの働くNGOが子供たち向けのコンピューター教室や、語学教室を開いていたこと。そして、もう一つは、私が1年前、ボランティア活動をしていたために、多くの子供たちとの面識があったことであった。また、更にもう一つ付け加えると、私がセルビア人共和国に住み、ボスニア連邦側で仕事をしていたことも理由の一つである。NGOの教室で知り合ったセルビア人の子供たちとプライベートな時間も共に過ごせる環境があり、1年前から交流のあったボスニアック人<sup>7</sup>の子供たちとは、ほぼ毎日同じオフィスで一緒に食事をしたり、話をし、交流を深めることができた。

ちなみにNGOのオフィスと、私の滞在場所の距離は、車で15分、自転車で40分という距離であった。

後に25名にまで正規メンバーが増えるFKクリロであるが、最初に接触をもったのは、コンピューター教室に来ていたセルビア人の少年たちだった。私はティナと共に、

5 「Fudbalski Klub KRILLO」の頭文字をとってFKクリロとなる。フットボール・クラブ・クリロの略称。

6 ユーゴスラヴィア崩壊前はセルボ・クロアチア語といわれたが、現在ではセルビア人はセルビア語、クロアチア人はクロアチア語、ボスニアック人はボスニア語と呼ぶ。

7 ボスニア・ヘルツェゴヴィナに住む、イスラム教徒のことを指す。以前はムスリム人とされていたが、現在では自らボスニアック人と呼んでいる。ちなみに、ボスニア人になると、ボスニアに住むすべての民族を総称することになる。

教室の終了後にプロジェクトの説明会を開いた。私はティナに通訳を頼み、子供たちにFKクリロ創設の主旨を説明し、クラブへの入会をお願いした。しかし、多くの子供は、その主旨である「民族混成」ということには関心を示さなかった。ただ、子供たちの顔にはサッカーがしたいという思いが詰まっていた。私は、しばらく動かししていない身体が自然と動いたのか、子供たちを連れて一緒にボールを蹴りに出かけた。

この日、まだ雪の残るイリジャ市の空き地で、サッカーをしたセルビア人少年であるダルコは、FKクリロ最初の正式メンバーとなった。私の大学ノートには、まだその時彼が名前と住所、電話番号を記した可愛いキリル文字がしっかりと残っている。この日以来、彼と私は毎日雪の上でサッカーをした。雪に足を取られて、まともにサッカーができない環境でも、夕方になると、私と彼の住むヴォイコヴィッチ集落の空き地でボールを蹴って、心を通わせた。

数日が過ぎると、彼が学校で友人を誘い始め、セルビア人共和国側では子供たちが少しずつ増えていった。3月には9名の子供たちが不動の正規メンバーとしてFKクリロでサッカーをすることとなった。

一方ボスニア連邦側では、昨年からの交流のあったボスニアック人少年のアドミールを中心に、NGOのオフィス近隣に住む少年たちが集まった。ボスニア連邦側の子供たちは5名ほどを除き、ほぼ毎日メンバーが変わった。そのため、私は約30名近くの子供たちと接触を持った。今でもイリジャを歩いていると、その時出会った少年たちが声をかけてくる。



泥だらけになった靴が真っ白になるほど深く積もった雪の上でのサッカー。まだ小さいダルコが懐かしい。



現在のアドミールの顔に大人らしい優しさが見えてきた。どんな時でも相手の気持ちを大切にす少年だ。

FKクリロの活動に参加したボスニアック人の子供たちとは、イリジャ市を流れるジェリエズニツァ川の河川敷でサッカーをした。常に「自分が一番」と示さんばかりに、闘志剥き出しでサッカーをする彼らは、幾度となく川にボールを蹴り込んだ。そんな時、流されるボールを子供たちは必死に追いかけて、川に入って取ってくるのである。「誰が行くのか」と躊躇することなく、子供たちは川に入っていった。ボール、楽しいサッカーができる時間というものを大切にしようという彼らの姿勢が、まっすぐ私に伝わってきたことを覚えている。

こうして2月の終わりまでに両地域あわせて20名弱の子供たちが集まり、クラブチームとしての活動を始めることとなった。

3月からは次のステップである、両地域の子供たちが共にサッカーをする合同練習が待っていた。私と雪の中でボールを蹴ってきたセルビア人

サラエヴォ中心街全景。左手に見える大きな建物が国立図書館。紛争中にほとんどの蔵書が焼失した。



と、何度も冷たい川の中に入りながらも、サッカーをしてきたボスニアック人の子供たちが、一緒にサッカーをするという日は近づいていた。

それは、このプロジェクトの最大ともいえる難関の道の始まりだった。

## 2 帰ってきたサラエヴォ

1999年の3月以来に訪れたサラエヴォは、街の中心街や、サラエヴォ国際空港では、再建に向けた動きが見られ、工事を進める機械の音が響き渡っていた。地雷原だった場所も幾分か減ったようで、生々しい黄色の「MINE（地雷）テープ」は見当たらなかった。道路もかなり修復したようで、以前は迂回して向かっていた場所にも直進して行けるようになった。

ボスニア連邦側には巨大なショッピングモールも登場し、まだ破壊された家々が連なる一角に、キラキラとネオンを輝かせながら、多くのお客を集めていた。

また、1999年までユーゴスラヴィア・ディナール（以下ディナールと略記）が通貨として出回っていたセルビア人共和国では、ディナールの姿は消えていた。そして、新たにボスニア連邦側で使われていたボスニア・マルク<sup>8</sup>とドイツ・マルクが正式の通貨として使われていた。ボスニア・マルク自体の紙幣や、硬貨もその種類を増やしており、ボスニアの国旗やエンブレムが刻印された硬貨には、ラテン文字とキリル

8 レートはドイツ・マルク1に対してボスニア・マルク1の等価レートである。KMの略称が使われる。



中心街を歩くサラエヴォ市民。高級店が建ち並ぶ日本の銀座のような場所といえる。

文字で硬貨の額などが併記されていた。紙幣も1マルク、5マルク、20マルク、50マルク、100マルクと5種類に増えていた。しかし、依然としてドイツ・マルクが、この国の通貨のように人々の財布を歩き来していた。

私の目には良い変化に映ったサラエヴォだったが、ティナはそんな姿とは反する「内の世界」の扉を開いた。私が日本で過ごしていた1年間、彼女はサラエヴォで「民族融和」のプロジェクトの最前線に立って活動を続けてきていた。彼女は、建物や道路が修復されても人々の気持ちがなかなか変わっていかないことを私に語ってくれ

た。また、昨年彼女の心を再び傷つけた、コソヴォ紛争がボスニア・ヘルツェゴヴィナの社会に大きな余震となって押し寄せてきたことが、彼女から明らかにされた。

彼女は、主にセルビア人共和国の女性や青年のグループと、ボスニア連邦のグループとの交流の掛け橋役となり、相互が交流する機会を増やそうと努力していた。毎日セルビア人共和国と、ボスニア連邦の間を歩き来し、多くの人々の「心の交流」を進めた彼女であったが、そんな1年間で彼女は心身ともかなり疲れていた。

理由は、1つが彼女を手助けしようとする人間がなく、全て模索の中で彼女自身が全てのプロジェクトを進めなければならなかったことであった。

二つ目の理由は深刻な問題だった。彼女は自分の「仲間」であるセルビア人に、活動を激しく批判されたのであった。

その日彼女は、交流プロジェクトのためにセルビア人共和国側で車を走らせ、活動の紹介にまわっていた。少しずつ活動に自信を持ち始めていた彼女は、セルビア人の子供たちが集う幼稚園に活動を紹介しに向かった。

その時だった。彼女の活動を知る、その幼稚園のセルビア人の男は彼女に激しく、まるで彼女がセルビア人ではないかのようにつめよった。

「ムスリム、クロアチア人、敵と一緒に過ごすなんて冗談じゃない。お前の活動は狂っている。いいか、これだけは理解しろ。今度お前の姿を見たら、俺はお前を撃ち殺す。」

この言葉が彼女の頭から消えることはなかったようだった。多くの人々が、なかなか理解できない活動とわかっていた彼女だったが、敵意をあらわに詰め寄ってきた

「仲間」の一人から受けた傷は大きかった。

「誰もが民族と民族の交流を望んではいない。多くの人が私の活動を理解できない。私はそのことは当然だと思う。戦争で家族を失っていない私には、戦争で家族、友人を失った人の心の傷は、理解し難いものだと思う。でも、例え少数でも民族と民族で交流する場を求める人がいれば、私は活動すべきだと思って、私は1年やってきた。でも、この1年で私は疲れたみたい。」

彼女が疲れきっていたことは、明らかだった。しかし、それは身体的というより、むしろ精神的疲労が多うかがえた。しかし、ここまで彼女が疲れきってしまう理由は、プロジェクトを通じて感じてきた人々の気持ちだけではなかった。

その答えの一つが、かつて同じ国だったコソヴォにあった。

1999年、私はそのコソヴォで吹き荒れていた紛争の嵐の中にいた。多くの人間が止める中、無鉄砲さが出て引きつけられるように私はベオグラードに向かった。3月23日のことだった。その翌日、NATOは空爆を開始した。予想もしていなかったベオグラード空爆もいきなり行われた。

私は、名残惜しさに押しつぶされそうにながらも、NATO空爆の開始前にベオグラードからサラエヴォへ逃げ、そして日本に帰国した。

そのコソヴォ紛争は、NATO軍の空爆を機に大量のアルバニア人難民を生み出し、世界中の耳目を集めた。日本に帰ってから、私の大学生活、私生活の全てが「NATO空爆」「コソヴォ」という色に染められていた。日本でも多くの関心を寄せた紛争ゆえに、紛争開始から多くの国際機関、NGOがコソヴォにその「行き先」の変更をしていった。

1995年の Dayton 合意以降、国際機関や国際的な基金、財団がボスニアの NGO を財政面で支える柱だった。それゆえに、このコソヴォ紛争で、ボスニアから多くの資金去っていったことによってボスニアの NGO は深刻な財政難に陥り、多くが姿を消していった。彼女の NGO も例外ではなく、深刻な財政難に陥っていた。1999年6月、日本の外務省から草の根無償資金を受け、素晴らしい事務所と、活動の基盤ともいえる8人乗りのバンが手に入った。

しかし、コソヴォ紛争が激化する中で彼女たちは資金獲得が困難になり、1999年の10月からはスタッフの給料も滞り始め、英語、スペイン語をはじめとする多くの語学クラスやコンピュータークラスなどがその数を減らし始めた。

最低限の生活が送れる程度だった彼女や、その他のスタッフの給料もまったくでない状況が4ヶ月以上も続いた。その状況が限界に達しようとしていた時、私はサラエヴォに戻ってきた。私が空港からこの NGO のオフィスに向かう中、彼女は自らの胸のうちを明かした。

「私今月で NGO を辞める。もうこれは何度も悩んで決めたことだから、変わるこ

とはないから。」

深刻な財政状況の中でも、何とか続けてきた活動だった。しかし、満身に給料が支払える状況がなくなってからは、人間関係までもが崩れ始めてきた。最後には「民族融和」を活動の柱としていたこのNGOの人間関係が、民族と民族との対立へと変わりつつあった。

そんな中での彼女の決断だった。私の到着から2ヵ月後である4月上旬、このNGOは3年半の活動に終止符を打った。

私と彼女が始めたプロジェクトであるFKクリロには、多くの子供たちと大人たちの笑顔があふれ、成長し始めていた。そんな暖かな空気を引き裂くような冷たい風が、わたしの心を重々しく吹き抜けていった。

このNGOが閉じられる日、私は最後にオフィスを出た。重苦しく木戸が閉まる音は、ガランとしたオフィスの中にこぼれ、私の心に言いがたい辛さを残した。

紛争から5年が過ぎ、これからが正念場ともいえた時期に突如彼女たちを襲ったのは、皮肉にも、かつての自分たちと同じ状況の中で苦しむコンヴォオだった。

一目に支援が必要だとわかる紛争中や終結直後は、緊急対応と言われる支援が必要である。それゆえ、コンヴォオに早期の大型支援が行われたことは、当然なことである。

しかし他方、紛争から数年がたった地域への支援は、世間の視点からそれ、人々の関心を集めるににくい点がある。しかし、紛争から3年5年がたった地域では、社会基盤の再構築を始めようと人々が動き始める。その時期の支援もまた大変重要な支援となる。それは、未来を作り出す大切な活動で、大いなる価値があるからだ。

しかし、芽吹き始めた多民族社会の再構築への動きの一つが、ボスニアの首都サラエヴォで終わりを向かえた。

春の訪れを告げる雨が、しんとサラエヴォの街を濡らしていた。

### 3 「サッカーがしたい」という思いを胸に

20名弱の子供たち集まり、FKクリロの活動も10日が過ぎた。この10日間私は、土曜日と日曜日の週末を抜いて、ほぼ毎日子供たちと共に、空き地や、河川敷に向かい、ボールで遊んだ。それは練習というには及ばないものであったが、子供たちの顔からは「楽しい」という気持ちが溢れ出ていた。

しかし、まだセルビア人共和国の子供たちとはセルビア人共和国で、ボスニア連邦の子供たちとはボスニア連邦でという具合に、別々の活動が続いていた。

そこで、私は3月から両地域の子供たちが、合同で練習する方向にプロジェクトを進めた。

2月27日の土曜日にボスニア連邦側のジェリエズニツァ川河川敷に、初めて両地域からの子供たちが集った。以外にもセルビア人共和国からは8名の子供が参加したが、ボスニア連邦からは1名だった。練習場を向かう途中、緊張した面持ちでやってきたボスニア人のセディンは、怖がっているのかずっと私の近くを歩き、セルビア人のメンバーたちと話そうとしなかった。

しかし、セルビア人のジョルジェが、彼と交流しようとして一生懸命話しかけ、彼の気持ちを和らげた。そんな彼の気持ちがセディンに伝わったのか、彼は練習が始まるとセルビア人のメンバーたちと違和感なくサッカーをしていた。この日ぎこちなさを残しながらも、セディンに声をかけたジョルジェは、後々もFKクリロのムードメーカーとしてチームを引っ張ることとなる

練習後、セディンは「セルビア人とサッカーするからって、何の問題もないよ。」と恥ずかしそうに一言の残して、帰っていった。セルビア人のメンバーたちは、類稀なるテクニックを持つセディンのプレーを絶賛し、心から楽しんでくれていたようだった。

この日を境に、私は積極的に合同練習の機会を増やそうと考えた。火曜日と木曜日をセルビア人共和国、水曜日と金曜日をボスニア連邦と場所を定め、その全てを合同練習とした。しかし、順調に進むであろうと考えていた私に、子供たちから厳しい答えを言い渡されるのは、初の合同練習を終えた数日後のことであった。

セルビア人の子供たちは、ボスニア連邦でサッカーをすることに何の抵抗もなく、毎日素直にサッカーを楽しんでいた。そんな彼らの姿を見て、私は3月に入ると、ボスニア人のメンバーたちにセルビア人共和国で練習しようと呼びかけた。その時の私は、不思議とこの国で民族紛争があったことをすっかり忘れていた。私は子供たちとサッカーをする日々の繰り返しの中で、子供たちの「楽しい」という思い一杯の笑顔に包まれていた。そんな温かな雰囲気は、私にボスニア・ヘルツェゴヴィナの持つ深刻な背景を忘れさせていたのだと、今強く感じている。



初の合同練習を終えた後に記念撮影。私の左上にいるのがセディン。ジェリエズニツァ川にて

「今日はセルビア人共和国でサッカーをするぞ。」と誘った私に対して、子供たちは私を現実の世界に戻すかのように、厳しい言葉を放った。

「セルビア人共和国ではやらない。」「行きたくない。」「何でセルビア人共和国でする必要があるんだよ。」

その時、笑顔を絶えない子供たちの顔からは、明るさが消えていた。そこには、「行きたくない」という気持ちがくつきと映し出されていた。

それでも私は、子供たちを説得しようと試みた。

「セルビア人共和国も同じだよ。サッカーしようよ。」

しかし、彼らから返ってきた言葉には、想像を越えた「民族と民族を隔てる壁の高さ」と、明らかな恐怖感というものを含んでいた。

「チェトニク<sup>9</sup>のいるところでサッカーは出来ない。」

「セルビア人共和国は危険すぎるよ。」

「セルビア人たちが何をするかわからない。」

私は、彼らの返答に言葉を失いそうになった。しかし、ここで彼らの主張を受け入れることを私の心は拒んだ。セルビア人共和国にボスニアック人の子供たちが来ないという状況が生まれれば、このプロジェクトのバランスは失われるということ、私は感じていたからであった。そこで私は、彼らにこのように伝えた。

「私はセルビア人共和国に住んでいる。ここと何も変わらない。皆、素晴らしい人間たちだよ。君たちも一緒にサッカーをしたじゃないか。危ないなんてことはないよ。」

今思えば、実に勝手な主張であり、強引な説得だったと思わざるをえない。

彼らはこう反発した。

「日本人のミーシャ(私のこと)<sup>10</sup>は大丈夫さ。でもボスニアック人である僕らは危ないんだ。戦争のことをミーシャだって知っているだろ。あいつらは僕らを殺そうとしたんだ。」

そして最後に私にどうしようもない無力感を与える言葉が、発せられた。

「僕の父さんは、戦争中にセルビア人に殺されたんだ。わかるだろ、ミーシャ。」

セディンだった。彼は数日前、一人で合同練習に参加して、セルビア人メンバーとサッカーをしていた。練習後には「問題ないよ。」と語っていた。そのセディンの言葉だった。私は、背を向けて帰っていく彼らを、ただただ見つめるしかなかった。

12、3歳の子供である彼らから真摯に伝えられたその言葉一つひとつを、私は正

9 第二次世界大戦中のドラジャ・ミハイロヴィッチ将軍をトップとするセルビア人王党派のレジスタンスのことで、90年代のユーゴ内戦においては、「殺し屋セルビア人」という意味で使われた。

10 私のニックネームがミハイルであり、その愛称である。

面から受け止め、考えなければならなかった。そして、一つだけわかっている事実が私の目の前に転がっていた。

それは、戦争を経験していない私、ましてや親を失ったことのない私には、これ以上彼らを執拗に誘うことは、出来ないということであった。

一人オフィスに戻った私に、ティナは悲しい表情を顔一杯に浮かべて語ってくれた。

「あなたもわかっていたことだと思うけど、戦争が残っていった人々の心の傷は本当に深いものなの。だから、彼らの気持ちは理解してあげるべきよ。でも、あきらめたらこのプロジェクトはおしまいだからね。きっと、チャンスはあるから最後まで努力しなさい。このプロジェクトにはチャンスがあると思ったから、私は協力しているんだからね。」

決してあきらめないという気持ちは一緒だったが、頑なに拒否する子供たちを前に、私はその時無力だった。

そんな中でも、水曜日と金曜日はボスニア連邦で合同練習が続いていた。

「どこでサッカーしようが、僕らは問題ないんだけどね。」とセルビア人のメンバーたちは屈託のない表情で、毎回練習に参加していた。しかし、火曜日と木曜日にボスニアク人のメンバーたちを迎えに車でやって来ても、子供は誰一人現れなかった。

子供たちを待っている時間、そして来ないとわかり空っぽの車セルビア人共和国に向かう時間、私はこの時間がとても辛かった。濃く始めた陽光が、イグマン山にうっすら残る雪を照らし、淡い色彩を帯びていた。

そんな時ズドラヴコは、空しさのつまった表情を隠そうと精一杯の笑顔を浮かべていた。そして、私を励そうとしてくれた。

「ミーシャ、明日は来るかもしれないぞ。今日はそろそろ行かないと遅刻だ。」

でも、その言葉はいつも私をひどく悲しくさせた。

ズドラヴコは、プロジェクトのためにドライバーとして名乗り出たティナの友人で、笑顔の素敵なセルビア人だ。私はどんなに忙しく動き回っていても、車の中では心を落ち着かせることができた。それは彼がどんな時でも笑顔を決やすことなく、私と話してくれるからだった。

誰一人現れなかった日もズドラヴコと私は、話しながら車を走らせた。

私とズドラヴコだけを乗せた車でセルビア人共和国の練習場に着くと、子供たちが残念そうな表情で、車からボールを降ろし、練習へと歩いていった。練習となれば明るく、楽しくボールを蹴り、その時間を満喫する彼らだった。しかし、彼らは練習が終わると、「いつになったらボスニアク人のメンバーがやって来てくれるのか」と問い続けた。私には答えることが出来なかった。

状況が変わることなく、1週間以上が過ぎようとしていた。私自身の中でも妥協点



NGOのオフィスの前でボスニアック人の子供たちと戯れる。笑顔の絶えない彼らにも超えられないものがあった。

を探る気持ちが動き始めていた。ボスニアック人の子供たちがセルビア人共和国で交流することがなくても、両地域の子供たちが、サッカーを出来る機会さえ持続できれば十分ではないかと考え始めていた。それは、このプロジェクトにおいて大いなる妥協だった。

気候は日に日に暖かくなり、サラエヴォの街を覆っていた雪は解け、雪の下からは新緑の芝と、タンポポなどの春の花が少しずつ顔を覗かせていた。もう季節は春になろうとしていた。

火曜日、いつも通り私とズドラヴゴはボスニアック人の子供たちを待った。来ないだろうと、当然のように車にエンジンをかけたその時だった。一人の少年が車の方に向かってきた。

アドミールだった。

「俺、練習に行くよ。」

「でも今日はセルビア人共和国で練習の日だぞ。」

「わかってるよ。」

私と兄弟のように話し込んだり、ふざけあったりする彼は、車に乗るとそれ以上話そうとしなかった。彼の顔からは、誰の目にも明らかな緊張感が伝わってきた。恐怖感なのか、私は彼を何とか和ませようと話しかけたが、彼は話そうとしなかった。

車はもうすぐボスニア連邦からセルビア人共和国へ入ろうとしていた。「民族と民族を隔てる壁」が、アドミールの視界に入ってきた。

アドミールは見たことのない地域を、依然として緊張した面持ちでキョロキョロ見回していた。何の目印もない境界線を越えると、ズドラヴゴが「セルビア人共和国へようこそ。」とアドミールに笑顔で話しかけた。アドミールは恥ずかしそうに少し笑った。

するとアドミールは僕に正直な気持ちを初めて明らかにした。

「俺はただサッカーがしたいだけだよ。彼ら(セルビア人のメンバーたち)とサッカーすることは楽しいからさ。でも、やっぱ怖いな。俺がボスニア人と知られたら、セルビア人に殴られるかもしれないと思っている。でも、行かないとサッカー出来ないから・・・」

沈黙が訪れると共に、彼は再び顔を強張らせた。

セルビア人共和国の練習場に着くと、ジョルジェをはじめセルビア人のメンバーたちが、嬉しそうに笑いながらアドミールの訪問を歓迎していた。

「よく来たな。」「ようこそ、早くサッカーしに行こう。」と彼の手を引いた。セルビア人の彼らの表情に、久しぶりの明るさが戻った気がした。

練習が始まった。近隣に住む大人や子供が見つめるのを気にしながら、アドミールは必死にボールを蹴り、サッカーをした。しかし、顔には依然として緊張感が漂っていた。しかし、そこには一生懸命アドミールに話しかける当時まだ14歳のジョルジェの姿があった。アドミールが自分の住むコミュニティに溶け込めるよう、精一杯の努力しているその姿は、私の心を強く打った。

練習を終え、車の待つ場所に向かう途中で、ジョルジェはアドミールに問いかけた。

「何も怖くないだろ。一緒だろ。俺たちセルビア人は殴ったりはしないよ。」

「一人で怖かった、殴られるんじゃないかなと思っていたからさ。でも同じだということを知ったよ。本当に楽しかった。」とアドミールは返した。

車に戻るとズドラヴゴが笑顔で私に言った。

「良かったな。なっ、チャンスはあるんだよ。」

そう言って彼は私の肩を叩き、アドミールを乗せてボスニア連邦へと向かって行った。



セルビア時共和国ヴォイコヴィッチでの雪上サッカー。私の左隣にいるのがムードメーカー・ジョルジェ。

「民族と民族を隔てる壁」である境界線を始めて超えようとしたのは、わずか14歳の少年アドミールだった。彼のこの行動が、その後1年以上活動が続き、多くの子供たちが交流する機会を与えたことは言うまでもない。

彼はその後、学校で多くのボスニアックのメンバーにセルビア人共和国の練習のことを伝え、一人、また一人と子供たちをセルビア人共和国の練習へと導いてくれた。

それが、最終的に両地域で全メンバーが練習するというプロジェクトの目的の達成へと繋がり、FKクリロの活動を大きく飛躍させた。

今では、ボスニアック人、セルビア人、そして私の帰国後の8月に入会したクロアチア人全員が、笑顔で、楽しそうに語りながら境界線を越えている。実際に目に見えない境界線は、今FKクリロの彼ら自身には違和感なく越えられる存在になっている。

しかし、今でもアドミールが初めて境界線を越えた時の顔は、忘れることが出来ない。

最後に道を開くのは、私ではない。私はそんなことを教えてもらったような気がしていた。彼ら自身が壁を越えようとしている姿は、私を原点に立ち返る機会を与えてくれた。私がふと思いついた「夢」ともいえるプロジェクトだが、「壁」を越える勇気を人々に与えるのは、主役である子供たち自身であったのである。そんなことを、私はこの日痛感し、これ以後、私が常に忘れてはならないこととなった。

この後、FKクリロは3月の活動を順調に進めていく。そして、私の前に心強い2人の挑戦者たちが登場するのである。初の親善試合を迎える3月19日に向けて、FKクリロはよりチームワークを強化し、子供たちが同じチームメイトとして交流するために欠かせない存在を得るのである。彼らなしに、この活動が継続はなかった。

#### 4 境界線の重み

「境界線」。サラエヴォには、セルビア人共和国とボスニア連邦を分断する1本のラインが走っている。この1本のラインにどれだけ大きな意味があり、人々の心を支配しているのかを、私は見落としていた。

FKクリロの子どもたちが今や、車の中で楽しそうに語り合いながら、何気なく越える「境界線」。私は、この「境界線」が存在しないかのように振舞う子供たちの姿を、いつのまにか当然のことのように感じていたのであった。

それは、FKクリロが創設1周年を迎え、春の到来と共に飛躍に向かおうとしていた2001年3月のことだった。

ヴォイコヴィッチから車を5分走らせればボスニア連邦に入る。しかし、車を運転できない私は、サラエヴォの中心街から帰ってくる時、いつもフラスニツァ<sup>11</sup>のバス停

から歩き、「境界線」を越えて、セルビア人共和国のヴォイコヴィッチ集落に帰宅する。30分ほどの道のりだ。

鉄条網、国境警備兵、パスポートコントロールなんてものは存在しない。それゆえ、どこが「境界線」なのか、私にはわからない。

しかし、そんな「境界線」は、この地に住む人々にとって大きな存在であり、見えなくとも人々の心を支配しつづけている、巨大なものであった。それを私は改めて知ることになった。

春の日差しの戻ってきた3月中旬、タンポポの花がいっせいに咲き乱れ、大地は緑と黄色のモザイク模様染められていた。

この日は、体育館使用に関する交渉のため、イリジャに行かなければならなかった。陽気な日の光にうとうとしながら、私はズドラヴコを待った。

FKクリロ専用の赤いバンが、大きなエンジン音を立てて向かってきた。デコボコの道を勢いよく走る姿が、私たちの子供たちを乗せる車らしいと、改めて思いながら、手を振った。

すると、助手席にもう一人誰かが乗っていることに気付いた。アーツォだった。

アーツォは私が初めてサラエヴォにやってきた時からの仲だ。セルビア人の彼は、ティナとズドラヴコの古くからの友人で、ヴォイコヴィッチのビリヤードカフェを営んでいた。根っからのひょうきん者で、ジョークの品評会では圧倒的な強さを誇る。英語も実に堪能で、映画やサッカーの話ビール片手によく語る私のかけがえのない友人だ。

そんな彼が、FKクリロの赤いバンに乗っている姿は初めてであった。

知人の家に行くために途中まで乗せてもらっているのかと、私は思っていた。しかし、もうすぐヴォイコヴィッチから出るところまできても、彼が車から降りる気配はなかった。

ズドラヴコが不思議そうにアーツォを眺めている私に気付いて、教えてくれた。アー



フラスニツァ(ボスニア連邦)とヴォイコヴィッチ(セルビア人共和国)を分ける境界線がここにある。向こうに見えるのがヴォイコヴィッチ集落。

11 サラエヴォ西部のセルビア人共和国との境界部分に位置する地域のこと。ボスニア内戦中はイスラム勢力の軍事拠点であった。

ツォはちょうど仕事になかったので、私たちと一緒にイリジャに行くということだった。いつものように上機嫌な彼は、わくわくした表情で私に、セルビア語の勉強をかねたジョークを一つ教えてくれた。しまいには、不振にあえぐサッカー・ユーゴスラヴィア代表を皮肉ったジョークを言い合いながら、3人で盛り上がっていた。

しかし、突如アーツォの顔から明るさが消え、沈黙が訪れた。車はフラスニツァの「境界線」を越え、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦に入っていた。沈黙は依然として続いていた。

FK イグマン<sup>12</sup>のスタジアムを抜け、ジェリエズニツァ川の横を走ってから少しして、やっと彼が口を開いた。

「戦争前、あそこが俺の家だった。」

指差した向こうには、確か昨年新装されたばかりのカフェがあった。

「2年ぶりだよ。2年!」と彼は、硬い表情で、しかも片言の英語で、私に伝えてきた。ズドラヴコが場を和ますように「2年ぶりというところが凄いだろ!」と笑顔をで振り向いた。

アーツォは戦争前の少年、青年時代を過ごしたイリジャの街の姿を、まるで外国に来たかのように、キョロキョロ眺めていた。表情は一向に変わることなく険しく、なぜか生まれ育った街に帰ってきたという安心感というものが感じられなかった。

イリジャのバスターミナルの駐車場に車を止め、歩き出すと、アーツォはどことなくおどおどした姿で、私たちの前を歩いた。

「何だか変わったんだか、そうでないのか、何もかも分からないな。」と言いながら、彼はあちこち見回した。

ヴォイコヴィッチでは、ティナの家だろうと、近くの喫茶店だろうと、ピリヤード場だろうと、必ずジョークの一つを飛ばし、笑わせるか、人をからかうかする彼から、そんな余裕のかげらも感じられなかったのは、この日が初めてだった。

用事を済ませた私たちが家路につこうとした時、ズドラヴコが彼に「ブミール<sup>13</sup>にも行くか?」と尋ねた。

アーツォは「行こうか。」と静かに応え、車に乗った。



イリジャを歩くアーツォ。ズドラヴコと話しながらも、その表情は硬い。

12 イリジャ市をホームとするプロのクラブチームで、現在2部リーグに属する。

13 サラエヴォ国際空港がある地域のこと。戦争中は空港を争いサラエヴォ最大の激戦地となった。

サラエヴォで最大とも言うべき激戦地だったのが、空港が位置するプミールだった。今では、この地域の安定化という目的のために派遣されているSFORの駐屯地が広がっている。そのSFORのベースにさしかかった時、アーツォが私に話しかけてきた。

「戦争中、あそこに前線があり、俺はあそこからムスリム人を撃っていたんだ。そしてムスリム人は俺たちを撃っていたんだぜ。」

「毎日そうしていたのか？」と問いかけると、彼はこう答えた。

「2年間、毎日あそこから撃つことが仕事だった。それがあの時代は当たり前だったんだ。毎日毎日、撃つか撃たれるかだ。」

彼の顔の表情と声からは、「致し方ないことだったんだ。理解してくれないか」という思いがつかまっていた。

サラエヴォ国際空港が真横近くに見えた。そして、ヴォイコヴィッチを見下ろす華麗なイリニャチャ山がすぐそばにそびえたっていた。

5年前こんな近くに、民族と民族が殺しあう前線があったことを知り、私はまた一つサラエヴォの抱える深い傷を見た気がした。

境界線を越え、セルビア人共和国に入り、「ヴォイコヴィッチ」とキリル文字で書かれた道路標識が見えると、アーツォの顔を長い間支配していた暗い緊張感が消えた。ヴォイコヴィッチの集落が前方に見えてきた。

「イリジャ、プミール、なんて違うんだ。まったく違う。セルビア人共和国とは別世界だ。」

ぎこちない明るさを含んだ声で、アーツォは同じ言葉を繰り返した。

ふと彼のほうに目をやると、彼の目にうすら涙が溜まっていた。ニコニコしながら、はしゃいでいたが、彼の顔には言いようのない、寂しさと、悲しさが詰まっていた。

そんな彼の気持ちを察して、ズドラヴコはまっすぐ前だけを見つめ、黙って車を走らせた。

「境界線」を越える時に人が感じる気持ち。その気持ちをいつも感じていなければならぬと、私の心に、彼の悲しみと寂しさの満ち溢れた顔は訴えかけていた。

FK クリロの活動が1年間続き、活動自体も成長し、飛躍しようとしていた時、私は根本的な何かを見失うところだった。

アーツォの夕日に照らされた、あの顔を私は一生忘れることが出来ないであろう。政治、またはサッカーというレベルで「境界線」がなくなろうと、この「境界線」は人々の心を重く支配し続けるのではないか、私はそんな気がしてならなかった。

ボスニア社会で生きる彼らの心の強さ、そしてその悲しさを理解することの難しさ、そして理解することの大切さをつくづく思い知った時だった。

その翌日アーツォと私は、一緒にサッカーをして、楽しくビールを飲んだ。アーツォ

のひょうきんな姿なくしてヴォイコヴィッチの楽しい空気はないのだった。そのいつもどおりの姿を見て、私は安心感というより、この国に生きる彼に、生きることの強さを教わったのではないかと感じていた。

半分以上残ったビールが、寂しそうにぬるくなっていた。

## 5 二人の挑戦者たち

アドミールのセルビア人共和国訪問を機会に、私は次のステップである指導者の発掘に動いた。当初困難と思われていた指導者の発掘は、ティナの人脈の広さが功を奏し、素晴らしい人材が早期に見つかった。

ボスニア連邦側からは、イリジャの初等学校<sup>14</sup>で体育教師をしているボスニア人のヒムゾー・バビッチがその役に名乗りをあげた。彼はボスニア内戦前、現在のセルビア人共和国に位置する町で、プロのゴールキーパーとして活躍し、その後トレーナー・ライセンス<sup>15</sup>を取得して、学校の教師を務めていた。

戦後は、セルビア人共和国の家を追われ、ボスニア連邦のイリジャに移り住み、イリジャの初等学校の教師を勤めていた。彼は、戦前の生活もあり、教師生活を通じてセルビア人共和国との交流を、学校のクラブ活動を通じて実践していた人物であった。

それゆえ、このプロジェクトには是非とも参加したいと快くコーチになった。理論と実践に裏付けられた練習メニューは、彼の就任前は素人の私の指導で練習していた子供たちにとって新鮮で、子供たちの顔もイキイキとした表情になった。

彼は、練習中の規律の管理も見事にこなし、子供たちが自由にサッカーを楽しめて、更には練習としての体裁の整った形式でサッカーが出来る環境<sup>1)</sup>を見事に成

し遂げた。彼は、FK クリロを単なるサッカーを楽しむ遊び場から、よりチームワークが重要になるクラブチームという存在にまで成長させた。

一方セルビア人共和国でも、私はコーチを見つけた。しかしながら、正確には見つけていたと言った方がいいかもしれない。私はセルビア人共和国からのコーチを、この活動を始めて2週間ほどたった時点で、既に決めていた。それは、絶大なる信頼感と、彼の子供に対する気遣いの細かさ、子供たちの彼に対する友好的な態度から、答えは明らかであったからである。



ヒムゾー・バビッチコーチ  
練習においてシステムの確認を  
行っている。緻密な練習メ  
ニューには信頼がおける。

<sup>14</sup> 日本の小・中学校にあたる。6歳から15歳の子供が通う。

<sup>15</sup> サッカーの指導員に与えられる免許。B、A、PROというランクごとに分かれる。



ズドラヴコ・ジェヴィッチコーチ  
子供たちのお兄さん役までこなす  
ユーティリティー・トレーナー。

私は、セルビア人共和国出身のコーチとして、ズドラヴコ・ジェヴィッチを指名した。プロジェクトを通じて、ドライバーとして、そして友人として私を支えつづけてくれていた彼に、私はどうしてもコーチになってほしかったのである。

彼は、自分にトレーナー・ライセンスがないこと、教師でもないことを気にして、引き受けるのを遠慮しようとした。しかし、私が彼を選んだ理由は、サッカー指導の技術という点、子供の間人形成の面でのサポートという点を重要視していた。セルビア人でありながらもボスニア連邦への運転を快く引き受け、ボスニアック人、クロアチア人とも友人として接する彼の姿は、きっと子供たちに良い刺激を与えると私は確信していた。

この私の判断は正しく、後に彼はFK クリロのコミュニティー拡大に大いなる功績をもたらした。彼は、子供たちの保護者との接触、他のクラブチームとの接触を積極的に持とうと動き回ったのだった。そして、FK クリロというコミュニティーが、サラエヴォ地域に根付いてゆくような基盤を作ってゆくのであった。今では、ボスニア連邦、セルビア人共和国両地域において多くの人脈を持ち、対外交渉を進めている。また、チーム内では子供たちの悩みなどの相談役から、遊び役までを務め、子供たちにサッカーだけでなく、一緒に過ごすことの楽しさを伝えている。

この挑戦者とても言うべき2人のコーチの存在が、この活動をその後1年以上も継続させることにつながった。私が帰国した後も、彼ら2人は自分たちで練習メニューを考え、親善試合をアレンジし、限られた活動資金の中でも、子供たちが満足いくほど楽しめる環境を提供し続けた。

## 6 サッカーが持つ力の偉大さ

サラエヴォで、「サッカーを通じて戦争によって受けた子供たちの心的外傷(トラウマ)を和らげていこう」という活動をしている人物がいる。

1995年11月に終結するボスニア内戦は、その最終局面を迎えた94年から95年はサラエヴォのみならず全土が激戦の中に置かれていた。人々は、スナイパーの銃撃から逃げるようにして出勤し、通学した。街で歩くことは、「死」を意味するといわれた時期だ。

そんな中、子供たちは無力だった。停電して暗い家の中で、迫撃砲やスナイパーの放つ銃声を耳にしながら日々を過ごすしかなかった。大好きなサッカーをしようとんでも、外に出ることは許されなかった。そんな子供たちの心の中に募る思いは、

戦争と暗闇が作り出す恐怖心だけだった。

この激戦の中、彼らにサッカーが出来る場所を提供し、気持ちを明るくさせる機会を与えたいと立ち上がった人物が、ブレドラグ・パシッチだった。

彼は1982年スペイン・ワールドカップで、ユーゴスラヴィア代表として活躍したサラエヴォ出身のスタープレイヤーだった。今でも彼の名前を知らない人はいないほど、素晴らしいプレイヤーだった。また選手時代から冷静で知的だった彼は、非常に人望の厚い人物だった。

彼は1994年、激戦のサラエヴォに「ブバマーラ・サッカースクール」という少年サッカークラブを創設した。彼が選手時代に蓄えた私財全てをクラブ創設に費やした。

「ブバマーラ」とは現地の言葉で「てんとう虫」の意味で、ボスニアでは「幸福を呼ぶ虫」とされている。「幸福を運ぶ」という思いをつめ込んだこのクラブの活動は、スナイパーの攻撃から守られるように、サラエヴォ・オリンピックのスケート会場であるスケンデリヤ・オリンピックホールの体育館で続けられた。毎日多くの子供たちが、銃声の中を走って体育館に向かい、サッカーを心から楽しんだ。

この活動は戦争終結後も続き、現在は7歳から18歳からなる約700名の子供たちが通うサラエヴォ最大の少年サッカースクールとなった。サッカーの実力も素晴らしく、国内の大会を総なめにし、国外でもオランダやスペイン、イタリアなどで多くの大会を制している。彼らのクラブハウスには、数多くのトロフィーが飾られている。

このクラブの理念は、今も変わらない。子供たちが、戦争によって受けたトラウマをサッカーによって拭い去っていくことを目的にしている。また、どの民族にも開けていて、ボスニア連邦に位置していながら、セルビア人共和国の子供たちをも募集している。

しかし、練習場やクラブハウスの場所がボスニア連邦に位置するため、セルビア



子供たちの指導は、毎日欠かさず朝から晩まで行っている。ブバマーラ練習場スケンデリヤにて

ブレドラグ・パシッチ氏 初対面の私に一生懸命アドバイスしてくれた。心豊かな人だとすぐに感じた。



人の子供たちには参加が厳しいとのことだった。それゆえに、パシッチ氏も早く民族関係なく参加できるような環境を作りたいと意気込んでいる。

パシッチ氏がこの活動を始めた背景には、確固たる意志があった。それは、「スポーツは、きっと民族が関係なく交流する機会を与えることができる。」という強い意志だった。彼は選手時代を通じて交流を深めたクロアチア人、セルビア人、ボスニアック人、そしてスロヴェニア人、マケドニア人、アルバニア人、モンテネグロ人のプレーヤーたちと、今でも交流を続けているという。

「私たちに戦争なんて関係ない。今は国が違って、共に選手時代を過ごしたかけがえのない友人だ。」と彼は自信をもって語る。

その思いには、彼自身がセルビア人とボスニアック人との間に生まれたハーフだと言うことが大きく作用していると、私は感じていた。混血の進んだボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、とりわけサラエヴォやモスタルなどに民族のハーフの人々が多い。そんな土壌の中で育った人々のもとに、最大の民族紛争が襲いかかったということは、皮肉なこととしかいえない。

パシッチ氏は、FKクリロのプロジェクトを全面的に支援してくれた。彼は、子供たちを募集するために重要なこと、スクールとして機能させるために必要なこと、コーチを見つける時に重要なこと、そしてサラエヴォでFKクリロのプロジェクトを始め、継続していく上で重要なサラエヴォのサッカー事情などを、私に丁寧に教えてくれた。

彼は、FKクリロの初の親善試合の相手も引き受けてくれた。また、その後、交流を深める多くのクラブとの接触の機会も与えてくれた。

プロジェクト開始から3回目を数えるサラエヴォ訪問においても、彼のアドバイスは、私に新たな可能性の扉を開いてくれる。

彼は、FKクリロの成長には決して忘れてはならない重要な人物の一人である。



パシッチ氏なくして私たちはなかった。サッカーを愛する紳士である彼の姿にあこがれる私とズドラヴコ。

彼とは日本 = サラエヴォ間のやりとりを手紙やEメールで続けている。私がサラエヴォ訪問を訪れる時の一つの楽しみが、彼との対面である。

成長を続けている私たちであるが、私たちの皆が全ての目標とするのが、このバマーラである。

## 7 バスがつないだ民族と民族

結果は惨憺たるものだった。Aチームの試合では、0 - 1と善戦したものの、Bチームは0 - 9と惨敗した。子供たちはロッカールームに引き上げると、悔しさを全面に出して、早くもう一度試合をさせてくれと、私に懇願した。

20名以上の子供たちが発する汗の匂いがロッカールームに立ち込めていた。そこには、ボスニアック人、セルビア人の子供たちだけでなく、彼らを指揮した2人コーチの声が響き、活気ある情景を作り上げていた。

そこには、「チーム」という一つの形があった。

試合前日、私は両コーチとメンバー全員をティナのNGOオフィスに集めた。そこで、両コーチから次の日の試合に向けたチーム構成が発表された。年齢と実力を考慮に入れた上でのチーム構成にし、バランスよく両地域の子供たちが交じり合うような構成を目指した。

メンバー発表が終わり、両チームキャプテンが発表されると、子供たちは一斉にクリロコールと、両コーチ、そして私の名前をコールし始めた。民族関係なく子供たち全員が声をそろえ、「クリロ」の名前を地元プロクラブの応援歌に載せてコールしていた。そんな空気に包まれていた私は、感激してこみ上げるものを必死に抑えていた。



第1回親善試合記念写真 対ブバマラ戦。負けはしたがとても素晴らしい交流の場となった。

あまりに感激して私も一緒になって叫んでいると、2階のオフィスからティナがビックリした表情でお戻りきた。あまりの騒がしさに耐えがなくなっていた彼女だったが、その様子を見て、私にニコッと笑顔を向けた。

試合当日、子供たちは緊張した面持ちで着替え、アップをしていた。しかし、子供たち以上に緊張していたのはコーチたちだった。彼らは2人で必死に作戦を考え、何度も何度も審判を務めることになった私のもとに開始時間を確認しに来た。

一生懸命取り組もうとする彼らの姿を見て、嬉しさがこみ上げてきた。子供たちもまた、コーチの姿に刺激を受けたのか、いつも以上に張り切ってアップを続けていた。

試合会場に対戦相手のブバマラが登場すると、同行していた親たちから応援の声が送られた。多くの親たちが、サラエヴォ中心街からは遠いこのイリジャの体育館まで子供たちを応援しに来ていた。その姿を見て、私は羨ましく思った。私たちの親たちも来てくれればという思いが募った。

試合は圧倒的にブバマラペースで進み、何度も何度もFK クリロゴールを襲った。しかし、Aチームは何とか1失点で乗り切った。Bチームはことごとくゴールを割られ、9失点をこらわった。子供たちは、その圧倒的な強さを感じるものがあったのか、試合中ずっとブバマラの流れるようなパスワークを見入っていた。

そんな一方的とも言える状況でも、私たちのチームワークは素晴らしかった。まだチームとしてサッカーをしてから時間がたっていないにも関わらず、子供たちはチームとしてサッカーをしていた。セルビア人、ボスニアック人が共にパスを交わし、ゴールを目指す姿は最高の光景だった。

中でも、セルビア人のジョルジェとボスニアック人のアドミールのコンビプレーは最高だった。ゴール10メートル前の所からアドミールが前線のジョルジェにパスを送り、ジョルジェはそのボールを直接シュートした。ジャストミートしたシュートは、惜しくもキーパーに阻まれた。しかし、その後に2人が何気なく交わした行動は、何ものにも変

え難い宝物が含まれていた。最高のパスを受けたジョルジェは、アドミールのもとに近づきハイタッチをしたのだった。互いに心と心で互いの最高のプレーを称えあっていた。

子供たちがチームとしての絆を築き始めたのは、この時からだった。試合に負けたことで、チームとして勝ちたいという目標が、子供たちの中から芽生えた。自分勝手なプレーの目立ったチームに、互いを認め合うパスがつながり始めていた。

彼らは、目標とチームワークという精神を胸に、その後も必死に練習を続けた。そして1年後の4月1日、彼らは私の目の前で、皆で導いた「勝利」というものを初めて経験するのであった。その時見せた彼らの笑顔は、私たちだけでなく、相手チームの子供たちにも温かな気持ちを与えていたと、私は感じている。

子供たちがコーチと共に作り上げてきた、かけがえのないチームというものが私の目の前に転がっていた。しかし、私にはやらなければならないことが、もう一つ残されていた。

それは、子供たちを常に支えつづけている親たちとの交流だった。プロジェクトの継続を望む以上、親にプロジェクトの内容を正確に伝え、承諾を得ることは必須の課題だった。それゆえ、私は初の親善試合の翌日から4月12日の帰国直前まで親への説得と、活動への協力をお願いしに家庭を訪問することとなる。

## 8 ボスニアの労働者たち

ボスニアの労働者たちの深刻な姿を見たいのであれば、カフェに行くべきである。

平日の朝10時、日本では業務に入ってから1時間ほどが過ぎ、仕事にリズムが出てくる頃だ。しかし、ここサラエヴォのカフェでは、そんな時間に30代から40代の働き盛りの男たちが、暖かなバルカンの陽の下で眠そうに話し込んでいる。

サラエヴォのカフェには必ずお客さんがいる。街外れの農村部の一角にある小さなカフェでも、お客さんは誰かしらいる。サラエヴォのカフェは大繁盛だ。それでもカフェのオーナーが大金持ちになるわけではなく、二束三文的な収益で何とか店を営んでいるに過ぎない。

ボスニアで、カフェは、日頃時間の潰し方に悩んでいる大人たちにとってジョーカーであり、いつでも迎えてくれる楽園だ。

夜となれば憂さを晴らすお酒を片手にサッカー談義とジョークのコンテストをしながら眠くなるのを待つのだ。

そんな光景が、私の身近なヴォイコヴィッチに広がっているのを見て、私はこの一見平和で、幸せなような姿の中に深刻な国情をうかがい知ることが出来た。

紛争が破壊した街の復興は、サラエヴォの中心街などの都市部だけを見れば進

んでいるかのように見える。しかし、サラエヴォの中心街バシュチャルシヤから、ミリヤツカ川を渡り、サラエヴォビール工場を抜け、山に登り始めると、いまだに激しく崩れ去った家、修復されない道路が視界に入ってくる。また、イリジャやグルバビツツアなどの、旧セルビア人勢力の支配地域では地雷原などの影響からか復興が進んでいない。また、境界線に位置するドブリニャ、フラスニツァなどの激戦地は、その修復も境界線の影響なのか進んでおらず、未だに激しく崩れた学校や工場など、規模の大きい施設が破壊されたまま残っている。

なぜ、このボスニアは紛争から5年もたっていないながら、人々の心を落ち着かせてくれるような復興にならないのであろうか。境界線のある地域こそ早急に復興を進め、人々の視界から戦争の産物を消し去るべきではないか。また旧大型工場などの再建は、この国の経済再建にとって大きな財産になるのではないか。エネルゴインベスト、ファモス<sup>16</sup>の2大企業の工場には、蜂の巣になった窓ガラス、迫撃砲を食らった屋根根などが無残に残り、使えそうもない鉄屑や、壊れた車が寂しそうに横たわっているだけである。

FKクリロの保護者の多くが、このエネルゴインベストやファモスで戦前は汗を流していた。

4月に入り、日差しに眩しさが増し始めたある日、私はイリジャのバス停でフラスニツァ行きのバスを待っていた。すると後ろから「ミーシャ!」と声をかけられた。振り向くと、ボスニア連邦の軍服を纏った男が、目の前に立っていた。

ゼミル・タバクの父親ラシムだった。仕事を終えてちょうど家に帰るところで、私はバスを待っている間、彼としばらく話した。

「軍隊で働いていたんですね。」とちょっと意外だったという思いが混じった口調で私が尋ねると、話は膨らみを増した。

「戦前はエネルゴインベストで毎日朝から晩まで働いていたもんさ。それが、戦争が終わったら工場は壊れっぱなしだし、仕事も勿論ない。でも家族のために仕事があれば働かなければならない。軍隊での仕事は最悪だよ。仕事も少なければ、勿論給料も少ない。でも、今はこの仕事しかないんだよ。」

最後にラシムは「ト・イエ・ト(こんなもんだよ。)」と言ってにっこり笑った。

苦しさど、どうにもならない空しさに対しての精一杯の笑みだと感じた。そこには、戦争で奪われたたくさんの何かがにじみ出ている。

ラシムはFKクリロの保護者の中でも重要な存在である。欠かさず顔を出す保護者会では「FKクリロをより発展させたい。両地域の子どもたちが交流する機会が試

16 ボスニアを代表する総合商社で、現在も経営されているが、工場などは未だに紛争中に壊された時のままである。

合などで増えることは本当素晴らしい。」と熱っぽく語り、FKクリロの成長を、保護者として一生懸命支えようとしている。

子供たちの試合にも駆けつけ、試合前のアップで子供たちのパス回しに混ざり、必死にボールを追っかけ、久々に重い身体を動かすのだった。

そんな彼をはじめとした多くの人が、このFKクリロを支えている。ボールを追いかけて、転びそうになり、笑っていたラシムの姿を見て、胸にジーンと来るものがあった。

旧ユーゴスラビア時代、この国からはドイツの戦後を復興に進め、今のドイツの経済基盤を作り上げた労働者が出て行った。そして、徹底した教育の中で優秀な技術者、労働者を生み出した。

そんな彼らが戦後、カフェで時間を潰さなければならない姿に空しさが駆け抜けてゆく。

日本を戦後の姿から蘇らせ、世界最高の経済大国へと導いたのは、私の祖父祖母の世代であり、50代、60代の絶対にあきらめることのなかった尊敬すべき人々であった。日本が持っていた技術力、魂に自信を持ち地獄の底から這い上がろうとしたのは日本人自身であった。

サラエヴォで大人たちと話すとききまわってこう言うのだ。

「昔は良かった。」

しかし、昔を振り返っている暇は本当はないはずである。「私たちの国を豊かにしたい。」「子供にプレゼントの一つでも買ってやりたい。」と思っている父親は本当にたくさんいることであろう。

そんな彼らが朝から晩まで一生懸命汗を流し、家族とともに夜を過ごし、「休日」になったらカフェに行って、友人と語り、毎日の忙しさと、サッカー談義に華を咲かせる。そんな姿が見たいという思いが、イリジャからの帰りのバスの中で募った。

## 9 親たちの決意

FKクリロの活動も最終段階に入っていた。子供たちとコーチとの交流は進み、練習は毎週土曜日曜の週2回に行くという方向にした。その理由は、サラエヴォの学校制度が午前クラスと午後クラスという2部制になっていて、平日は全員が参加できないこと、両コーチが平日ではあまりに負担が大きいからであった。

土曜日はボスニア連邦、日曜日はセルビア人共和国で練習が行われた。毎週20名強の子供たちが練習に参加し、交流の度合いを日に日に深めていた。

そんな中、ティナが私に重要な提案をした。

それは、保護者への活動説明と、子供の活動参加への同意を得るべきであるというものであった。子供たちの中には、民族問題に敏感な親を持つ子供たちが少

なくない状況であった。また子供が、親にどこでサッカーをしているという説明をしているかということが明らかではなかったため、問題が起きた時には大問題になりかねなかった。そこで私は、メンバーは保護者の承諾書なしで活動に参加することは出来ないという決まりを作り、全家庭を訪問した。

また、私はこの時、親との交流にもう一つの可能性を見出そうとしていた。2名のコーチだけでは限界のある状況が、今後必ず現れてくると私は思っていた。そこで、私はこのFKクリロのコミュニティに、保護者も巻き込む形で発展をしようと考えていた。それは子供だけでなく、親の世代にもこの活動の理念を広げようという目的が背景にあったからであった。

この目的は半年後に形となって実現する。2000年10月に初めて開催した保護者会にはじまり、1年後の4月8日には親子サッカー大会という形でもって確実なる基盤を築くこととなる。

家庭訪問は、ボスニア連邦側をヒムゾーと、セルビア人共和国側をズドラヴコと共にまわることにした。ボスニア連邦側のセミレ・タバクの家から始められた家庭訪問は、約3週間続き、終了したのは私がサラエヴォを発つ前日の4月12日のことだった。

最初の2週間は順調に進んだ。毎日3家庭ほどを回り、1時間ほど父親と母親と語り合い、承諾書にサインをもらった。多くの家庭が活動に共感を示してくれた。その頃の毎日、私とコーチは、夕食前に各家庭で振舞われたコーヒーやケーキでお腹一杯になって家路についたものだった。

しかし、家庭訪問も終わろうとしていた4月上旬。私は毎回FKクリロの練習に顔を出し、思う存分サッカーを楽しむボスニア人のバシッチ兄弟の家を訪問した。そこで私を待っていた言葉には、根深い民族感情があった。

「殺し屋のところ子どもを行かせるわけにはいかない。帰ってくれ。」という一言で最初の訪問は終わった。

私とヒムゾーはドアをパタンと閉められ、ただ帰るほかなかった。

しかし、バシッチ兄弟の2人は、どうしても練習に参加したいと、私に懇願するのであった。親に話し合いの余地がないといえる明らかな反応を受けていた私であったが、サッカーをしたいという強い希望をもっていた2人を前に、私は可能な限り説得を試みようとした。

それから、4度目の家庭訪問だった。この日断られれば、彼ら兄弟の気持ちをかなえることは出来なかった。翌日の朝6時にはベオグラード行きのバスに乗らなければならなかった私は、背水の陣で望んだ。

相変わらず厳しい表情を浮かべた母親は、予想に反し私とヒムゾーを家の中に招いた。

部屋ではケナンとアマルの2人が父親と共に、ソファーに座り、ニコニコしていた。しかし、ケナンとアマルの顔とは対照的に父親と母親の顔は厳しいものだった。

父親から切り出した。

「セルビア人共和国の練習に参加しないという約束が出来れば、私は承諾しよう。」

しかし、そこでヒムゾーは引かなかった。

「あなたは私のことを知っているはずですよ。あなたの息子さんであるケナンとアマルが通う学校の教師です。セルビア人共和国での練習に参加させたくないという気持ちは、ボスニアックである私にも理解できます。でも、子供たちは行きたがっています。何とか許してあげてくれませんか。」

教師と保護者という関係で、以前より面識のあるヒムゾーと父親の目と目が語り合っていた。

ヒムゾーは続けた。

「私はこのプロジェクトに希望をもっています。スポーツの力を信じて私はずっと教師をしてきました。セルビア人の子供たちは私たちと何も変わりありません。あなたも知っているはずですよ。信じてくれませんか。私が彼らについています。セルビア人共和国であろうと、ここ(ボスニア連邦)であろうと私は常にあなたの息子さんたちのそばにいます。信じてください。」

ヒムゾーの顔には、ケナンとアマルにサッカーをさせてあげたい。そして、このプロジェクトを成功させるためにも、彼らの参加を父親に理解してほしいという強い思いが溢れていた。

父親はヒムゾーの目をしばらく見つめた後、私の目を透き通るような視線で見つめた。しばらくの間沈黙があたりを支配した。バシッチ兄弟は父親の顔を見つめていた。

「あなた(ヒムゾー)を信じます。そしてあなた(私)のプロジェクトにかけてみよう。」

そう言って父親は承諾書にサインをし、私とヒムゾーと握手をした。ケナンとアマルが隠しようのない嬉しさを顔一面に表現していた。

父親と握手した時、私は、胸に2ヶ月間やってきた活動の全ての思いがこみ上げた。父親が信じてくれたことの嬉しさ、そして何よりヒムゾーの真剣な思い、このプロジェクトを必死に続けていこうという姿を目の前で見て、私は大きな責任感と、素晴らしい人間と出会ったことを強く感じた。

玄関の外でバシッチ兄弟の親友で、FKクリロの中心メンバーであるエディンが待っていた。承諾書にサインしてくれたことを、バシッチ兄弟はエディンに恥ずかしそうに伝えた。3人は最高の笑顔を私に見せてくれた。



アドミールの家を訪問した後に家族と共に。  
右から、父親、アドミール、母親、SFPスタッフ岡崎左希子、アドミール兄。



やっと承諾書にサインがされた。嬉しそうに承諾書を見せるアマル(右)、誇らしげなケナン(中央)、そして待ちくたびれた友人エディン(左)

これで彼らが一緒にサッカーでできるんだ。

全ての親の承諾書を抱え、私はティナのもとに向かった。

「あなたいつ帰ってくるの。それまでは、私たちに任せておきなさい。絶対継続させていくから、安心して。このコミュニティは、今ではあなただけでなく、私、ヒムゾー、ズドラヴコ、そして子供たちと理解してくれた親たちのものだよ。私たちには続ける義務があるのよ。それをしっかりと胸にしめて、日本で頑張りなさい。」

翌日の4月13日朝6時、セルビア人共和国側のバスターミナルから、私はベオグラードに向かった。車中、頭に浮かんだのは、雪の上でのサッカー、そしてセルビア人共和国へ向かうアドミールの姿、必死に親を説明したヒムゾー、そしてサッカーをする子供たちの姿だった。眠くなり目を閉じても、子供たちの声と、サッカーボールが転がる音が耳から離れなかった。

## 終わりに

私の帰国後、FKクリロはティナ（セルビア人共和国出身）とワヒダ（ボスニア連邦出身）の2人のオフィスワーカーと、ヒムゾー（ボスニア連邦出身）とズドラヴコ（セルビア人共和国出身）の2人のトレーナーに支えられながら、継続していった。

ワヒダは、ティナのNGOが閉鎖される時まで、スタッフとして働いていた女性で、早くからFKクリロの活動に多くの助言を与えてくれていた。彼女は主に活動報告書を日本側に送る役目を担った。そしてティナのサポート役としてFKクリロを支えた。



FKクリロを支える頼もしいスタッフたち 左からヒムゾー・バビッチ、ズドラヴコ・ジェヴィッチ、私、ワヒダ・ゴロ、クリスティーナ・シェシュリーヤ



最後の練習を終えて子供たちのやる気に満ちた顔が私を送り出してくれた。

現在はこの4人のスタッフと、25名の子供たち、そして保護者たちによってFKクリロは支えられている。

週2回の練習と、月1回のスタッフ会議とメンバー会議、そして2ヶ月に1度の保護者会を通じて、活動の問題や、親善試合などの予定を話し合い、サラエヴォにて自主的な活動を続けている。

私はこの活動を今後も続けていくつもりである。月¥75,000をサラエヴォに送り、彼らはその費用をもとに練習や親善試合などを通じて交流を深めている。

今では、多くの保護者が練習や試合に駆けつけ、応援してくれている。

今年の4月に家庭訪問した際、最初にFKクリロに入会した少年ダルコの父親であるチェドミリにふとこんな問いを投げかけた。

「息子であるダルコがボスニアック人の子供たちとサッカーをしていることを、あなたは親としてどう思っていますか。」

彼はこう答えた。

「ミーシャ、なんでそんなことを聞くんた。民族と民族が憎しみ合うことなんて、もう



ワヒダ・ゴロ(左) 冷静沈着な判断と、女性とは思えないほどのサッカー知識を有する変わり者。非常に有能なスタッフ。

私たちの世代で終わらせるべきなんだ。そうだよ。」

彼のその言葉は、今でも私を勇気づける言葉である。戦争中ずっとサラエヴォで生活し、家族を守りつづけた彼の言葉には、計り知れない重みがあった。

ボスニアは、今でもクロアチア人勢力を筆頭に多くの民族問題を抱えている。しかし、今サラエヴォにあるこのFKクリロというコミュニティーは小さな、本当に小さなコミュニティーではあるが、かけがえのない、民族と民族が関係なく触れ合うコミュニティーである。

日々、民族の憎悪が渦巻くサラエヴォという地で、活動を続けていく彼らを、私は今後も決してあきらめることなく、支えつづけていこうと決意している。

\* \* \*

この活動を支えつづけてくれた、秋野豊ユーラシア基金の方々に心から感謝の気持ちを伝えたい。秋野洋子さんには温かい支援が寄せられ、活動が苦しい状況にさしかかっていた時期を支えていただいた。そして、広瀬佳一先生には、この報告書を含めて多大なるご迷惑をおかけしてにも関わらず、FKクリロを支え続けていただいている。

改めてここに感謝の気持ちを伝えるとともに、期待を裏切ることなく活動を支えることを誓うこととする。

秋野豊ユーラシア基金は、私の「夢物語」にチャンスを与えてくれた。久しぶりに読み返してみた2年前のプロポーズを読んで、私はこれをどう転んでもプロポーズとは思えなかった。そんなままとまりというものを欠いた、私の言葉の一つひとつが、今形となってサラエヴォで私を待っている。FKクリロは私にとって最高の宝物である。その宝物が、私の夢だった秋野先生に見つめられているかのような感覚をふと感じる時がある。

そんな気持ちにさせてくれるのも、このプロジェクトが秋野豊賞の受賞から始まったからだと思っている。

私の故郷となりつつあるボスニア・ヘルツェゴヴィナに思いを込めて、ここに筆を置く。